

選評

須網美由紀

セバスティアーノ・ルチアーニ作、《サン・ジョヴァンニ・クリソストモ祭壇画》に関する一解釈 ―聖堂再建時における図像プログラムを視座に入れて―

本論文は、セバスティアーノ・ルチアーニ（セバスティアーノ・デル・ピオンボ）のヴェネツィア時代の代表作のひとつでありながら、主題解釈に関する先行研究が比較的少なかった《サン・ジョヴァンニ・クリソストモ祭壇画》（1508-10頃）について、新しい意味解釈を提示したきわめて意欲的な論文である。須網氏は、周到な現地調査および文献渉猟をもとに、本祭壇画が設置されたサン・ジョヴァンニ・クリソストモ聖堂の性格およびそれが再建された経緯、聖堂に所蔵される聖クリュソストモスの聖遺物とそれを用いた典礼との関連、同じ聖堂内の他の2点の祭壇装飾との主題的連関性、同時代の社会的・宗教的状况といった非常に多角的な観点から本作品を検討している。そしてそのことにより、きわめて密度の濃い作品解釈の提示に成功しており、本論文は美術史研究のすぐれた成果として高く評価できる。

とりわけ、祭壇画内に集う聖人たちのうち、アトリビュートを伴わないため従来さまざまに解釈されてきた聖人を、ビザンティンの写本装飾画の伝統に拠って聖パウロと同定し、さらに聖クリュソストモスの持つ書物に記されたギリシア語が、パウロ書簡にしばしば見いだされる語であることから、クリュソストモスがパウロ書簡に注を施しているところであると推定した見解は、たいへん魅力的であり、この作品研究のさらなる展開に繋がる新たな視座を提示している。この図像解釈の過程において須網氏は、イタリア・ルネサンス美術の研究者でありながら、ビザンティン美術の研究成果への目配りも怠らず、それが結果として新たな図像解釈につながることとなった。このように研究史を広く見渡す柔軟な研究姿勢も高く評価できる。

須網氏はまた、本祭壇画の制作が、聖堂再建に際して他の二つの祭壇装飾と主題的な相互関連性を付与された上でなされたものと推定し、そこには東西教会の平和的な合一への希望が託されているとする、当時の歴史状況を踏まえたきわめて意義深い見解を提出している。聖堂再建時の祭壇装飾に関しては、須網氏はすでにトゥリオ・ロンバルドによる《ベルナボ祭壇彫刻》について、本学会誌上に論文を発表しており（『美術史』159冊）、それも本論文同様たいへん優れた論考であった。今後は、ジョヴァンニ・ベッリーニによるさらなる1点《ディレッティ祭壇画》に関する論考も加え、再建されたサン・ジョヴァンニ・クリソストモ聖堂における3つの祭壇装飾全体の図像プログラムを大きくまとめた研究の完成がおおいに期待されるところである。

以上により、須網美由紀氏に『美術史』論文賞を贈り、その努力と功績を称えたい。